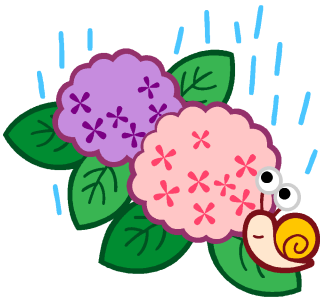

説教要旨「隔たりを乗り越えて」

使徒言行録　１０章　１～１６節

世界の様々な民族、異邦人に神の救いと恵みが広げられた。それはわたしたちにとっては当たり前で、自明なことですが、聖書の時代のユダヤ人にとっては、神の救いはイスラエルに対する約束であり、神の恵みはあくまでもユダヤ人だけのものだと理解されていたからでした。そんな常識に凝り固まっていたペトロに、神は幻を見せました。それは律法で禁じられている動物を食べるようにと促す幻です。「大きな布のような入れ物」に「あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥」が入っており、そこには律法で「清くない物、汚れた物」とされていた動物も含まれていました。これまで律法で禁じられた汚れた物を口にしたことがないペトロはそれを拒否しようとします。しかし神は、そこでペトロにはっきりとご自身の意志を語られたのです。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない」と（15 節）。

使徒言行録は、イエス・キリストの福音がユダヤ人の枠と制限を越えて、これまで神の恵みと救いから退けられていた人々が、神の前に等しく招かれ、その恵みにあずかるようにされていったことを明らかにしています。一民族の宗教にすぎなかったユダヤ教が、その枠を大きく踏み越えて、全ての人々を神の救いへと招くキリスト教となってゆく様子を描き出しているのです。

住む国や地域が違う。思想・宗教が違う。言語が違う。肌の色が違う。そんな違いが世界には大きな隔たりとして数え切れないほど存在しています。そんな大きな隔たりどころか、ほんのちょっとした違いで誰かを排除したり、対立していがみあってばかりのわたしたちではないでしょうか。

イエス・キリストの福音は、わたしたちの間にある強固な“隔ての壁”を突き崩し、打ち破る力を持っています。ペトロは語ります。「この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しが受けられる」（使徒 10:43）。そこにはユダヤ人と異邦人という人間的な区別も差別はもはやありません。イエス・キリストは、わたしたちの“隔ての壁”を打ち破り、突き崩すために、十字架にかかられたからです。

（２０２２・６・５　説教者：稲垣真実）